

B

明治の熊本城 庶民どっと

藩置県などで結局実行されなかったが、西南戦争が起こった77年に焼失した。1960年に鉄筋コンクリート造で再建されている。

熊本地震からの復興のシンボルとして、26日から内部が一般公開(熊本県在住者限定)される熊本城天守閣(熊本中央区)。廃藩置県前年の1870年(明治3年)にも庶民を対象に、異例の一般公開が行われていた。「実に熊本落中(城下)は一目に相見え」。見学した庶民の日記には、大天守からの眺望に感動する様子がつづられている。(若林圭輔)

明治維新後も全国の藩はしばらく存続し、城は引き続き政治・軍事の中心だった。しかし当時の熊本藩は、率先して減税などの開明的な改革を進めており、熊本城の天守閣や櫓を「戦国の余物」として解体することを決定。廃棄に先立つイベントとして70年秋から、身分や性別を問わず城を公開した。

熊本市立図書館が所蔵す

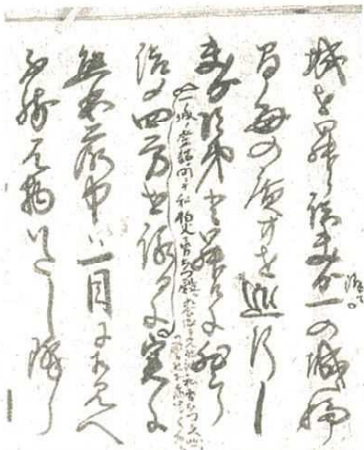
150年前 解体構想で公開

天守閣の眺め 感動の日記も

る玉名郡江田村(現・熊本県和水町)の農民、五野栄八(保萬)の日記に、同年12月18日の「御城拝見」の様子が記されていた。栄八は前日から熊本に入り、翌朝「大勢にて登るも出来かね」る混雑の中、小

天守の入り口から入城。各部屋に置かれていた大砲や小銃、弓、砲や鐵などを見学し、「一の城」(大天守)の最上階から「四方熊本落中を見物」した。そしてかつては御城拝見が禁止されていたことを振り返り、時代の変化を「時節到来」と感慨深くつづっている。

三沢純・熊本大准教授(日本近代史)は、「階級意識が残る時代に権力の象徴である城を庶民に公開したのは極めて異例。率先して改革を進めていることを政府や全国にアピールする熊本藩の意図があったのだろう」と話している。



熊本城見学の様子を記録した五野栄八の日記(部分)。1行目に「一の城」(大天守)と見える(熊本市立図書館蔵)